

15歳のニュース

3.11 東日本大震災から5年 「未来の命を守る人になる」 つらい記憶より友達との思い出 只野哲也さん

15歳のニュース 2016年3月5日

大川小で被災、校舎保存望む 只野哲也さん（16）

宮城県石巻（いしのまき）市立大川（おおかわ）小学校は、東日本大震災（だいしんさい）の津波（つなみ）で児童70人が死亡、4人が行方（ゆくえ）不明となり、教職員も10人が犠牲（ぎせい）となる大惨事（だいさんじ）に見舞（みま）われた。直前まで校庭（かてい）にいて生還（せいかん）できたのは、わずか児童4人と教師1人。「自分が生きている意味をずっと考えている」。奇跡的（きせきてき）に助かった1人、只野哲也（ただのてつや）さん（16）は、母のしろえさん（当時41歳（さい））、妹の未捺（みな）さん（同9歳）、祖父の弘（ひろし）さん（同67歳）の家族3人を失う悲しみにも直面した。「亡くなった友達にちゃんと報告（ほうごう）できるよう、未来の命を守る人になる」。決意（けつぎ）は固い。【石巻通信部・百武信幸（ひやくたけのぶゆき）】

勇気（ゆうき）ももらえる場所

震災（しんさい）当時（とうじ）小学5年生（しょうがくごねん）だった只野（ただの）さんは現在（げんざい）、石巻市内（いしのまき）の県立（けんりつ）高校1年生（こうこういちねん）。強豪（きやうごう）の柔道（じゅうどう）部（ぶ）に入部（にゅうぶ）し、日々練習（れんしゅう）に励（はげ）んでいる。試合（しあひ）や勉強（べんきやう）で悩（なや）んだ時は大川小（おおかわしょう）の被災（ひさい）校舎（がう）に足を運（は）ぶ。「気持ちをリセット（りせっと）し、勇気（ゆうき）ももらえる場所（ばしょ）だから」。只野（ただの）さんはためらいなく話す。

2011年3月11日午後3時半過ぎ。待機（たいき）していた校庭（かてい）から、やや高台（たかだい）にある橋（はし）のたもとに避難（ひなん）を始めて間（ま）もなく、北上（きたかみ）川（がわ）

を遡上（そじやう）したとみられる津波（つなみ）に襲（おそ）われた。激しい波（なみ）に押（お）されて気を失（う）ったが、先に山の斜面（しゃめん）に上がった友達（ともだち）に引っ張（ひ）かれて助（たす）かった。「どれくらい（い）気を失（う）っていたか（か）分からない。偶然（ぐうぜん）助（たす）かった」。近くにいたはず（はず）の小学3年生（しょうがくさんねん）だった未捺（みな）さんや友達（ともだち）とは離（はな）れ離（はな）れ（な）らなくなっていった。

「俺（おれ）、超（ちやう）幸せ（しあわせ）だったじゃん」

只野（ただの）さんは震災（しんさい）後（ご）、何度も被災（ひさい）校舎（がう）を訪（たず）ねて校舎内（がう）の清掃（せいそう）活動（かどく）もしてきた。周囲（しゅうい）にあった建物（たてもの）は撤去（てつきよ）され、残（のこ）るのはこの校舎（がう）だけ。津波（つなみ）の傷痕（きずあと）は今（いま）も痛々（いたいた）しく、つらい記憶（きおく）も呼び起（よ）こす。「でも、それ（それ）より友達（ともだち）と過（あ）ごした思い出（おぼえ）がはるかに上（あ）回る。ここでサッカーして、桜（さくら）の花見（はなみ）しながらご飯（ごは）を食べ（た）、雪合戦（ゆきあは）して、俺（おれ）、超（ちやう）幸せ（しあわせ）だったじゃんって思う。生きて思い出（おぼえ）出す（だ）すことができ（き）て、悩（なや）んでたら申し訳（わけ）ないな、って思う」。自宅（じたく）も含（ふく）め、古里（ふるい）の風景（ふうけい）が消（き）えてしまった只野（ただの）さんにとって、校舎（がう）は唯一（ゆいいつ）、思い出（おぼえ）に戻（もど）れる場所（ばしょ）でもある。

震災（しんさい）直後（ちかご）から「亡（な）くなった友達（ともだち）のため（ため）にも知（し）っていること（こと）を話（は）したい」と証言（せいげん）してきた只野（ただの）さん。懸命（けんめい）にあの日（ひ）の出来事（できごと）を周り（まわり）の大人（おとな）や報道（ほうど）機関（きかん）の記者（きしや）たちに話（は）す中で芽生（め）えたのが「友達（ともだち）が生（な）きた証（あか）しを残（のこ）すため（ため）にもあ（あ）の校舎（がう）を残（のこ）したい」という思い（おも）いだ。2013年（ねん）秋（あき）、東京（とうきやう）で開（あ）かれた集（あ）いで只野（ただの）さんが意見（いけん）発表（はつぷつ）すると、卒業（そつぎやく）生の先輩（せんぱい）5人（にん）も「私（わたし）たち（たち）も同じ（おな）じ」と声（こゑ）を上げて一緒（いっしょ）に活動（かどく）を開始（かいし）した。15年（ねん）3月（げつ）には地元（じよん）の集（あ）いや国連（こくれん）防災（ぼうさい）世界（せかい）会議（かいぎ）のフォーラム（forum）で、個々（こご）の思い（おも）いを発信（はつしん）した。只野（ただの）さんの発（は）した言葉（ことば）から校舎（がう）保存（ぼんぞん）を望（のぞ）む声（こゑ）が地元（じよん）にも広（ひろ）がり、大川小（おおかわしょう）を「震災（しんさい）遺構（いこう）」として保存（ぼんぞん）するかどうか（か）の検（けん）討（たう）が始（はじ）まった。

ちゃんと生きてる

今年（ことし）の2月（に）13日（にち）、保存（ぼんぞん）するかを判断（はんぱん）するため、石巻（いしのまき）市長（しやう）が地区（ちく）住民（じゆん）から直接（じきやく）意見を聞（き）く公聴会（こうちやうかい）が開（あ）かれた。柔道（じゅうどう）の試合（しあひ）で参加（さんか）できなかった只野（ただの）さんは、父（ちち）の英昭（ひであき）さん（44）にビデオメッセ（じ）を託（たく）した。会場（かいじやう）には「近い（ちか）い将来（きやうらい）起こ（お）る災害（さいがい）で1人（ひとり）でも多（おほ）くの命（いのち）が救（きう）えるように、震災（しんさい）の記憶（きおく）を風化（ふうか）させず（さ）ず語（か）たり継（つ）いでいくため（ため）絶対（ぜったい）に必要（ひつやう）になると思（おも）います」と訴（う）った。える力（ちから）強い言葉（ことば）が流（なが）れた。「見る（み）るのはつらい」と解体（かいたい）を望（のぞ）む遺族（いぞく）にも心（こゝろ）を配（く）って「みんな（みんな）が納得（なつとく）でき（き）るよう（よう）もつと話（は）し合（あ）って」との呼（よ）び掛（か）けに会場（かいじやう）から賛同（さんどう）の声（こゑ）が上が（あ）った。

只野（ただの）さんがこの5年（ごねん）を振（ふ）り返（かえ）る。「やっぱり（やっぱり）もう元（もと）には戻（もど）らないんだ（んだ）なって実感（じつかん）して苦（くる）しくなる時（とき）もある。よく『あなた（あなた）は選（えら）ばれた人（ひと）』とか言（い）われるけど、偶然（ぐうぜん）生き残（な）っただけ（だけ）。だから（だから）亡（な）くなった友達（ともだち）に堂々（どうどう）と『ちゃんと生きてるよ（よ）』って伝（つ）えられるようにしたい（したい）。今の夢（ゆめ）は「災害（さいがい）で人（ひと）を直接（じきやく）助（たす）けられる消防士（しょうぼうし）」。校舎（がう）を訪（たず）ねるたび（たび）、そ

の夢を胸に刻み直している。

■ KEY WORDS

【大川小学校（おおかわしょうがっこう）】

北上川の河口から約4キロにあり、児童108人が通っていた。2階建て校舎の屋上を越（こ）える津波（つなみ）にのまれた。教室と体育館を結ぶ渡（わた）り廊下（ろうか）はねじ倒（たお）され、校舎全体が吹（ふ）きさらしの姿で残っている。震災（しんさい）後は無事だった別の小学校の校舎に間借りし、現在はさらに別の小学校の敷地（しきち）内に仮設校舎を建て、児童29人が学んでいる。

【北上川（きたかみがわ）】

岩手県と宮城県を流れる東北一の1級河川。流路延長249キロ。津波は河口から約50キロまで遡上したとされる。堤防（ていぼう）が決壊（けっかい）したり、橋の一部が流されたりした。

【国連防災世界会議（こくれんほうさいせいかいぎ）】

国際的な防災戦略を議論する国連主催（しゅさい）の会議。1994年に横浜市（よこはまし）、2005年に神戸市（こうべし）で開催（かいさい）。第3回が15年3月に仙台市（せんだいし）で開かれた。災害による死亡率や経済損失の低減など、国連が世界的な防災戦略で初めて具体的な目標を掲（かか）げた。

【震災遺構（しんさいいこう）】

東日本大震災（だいしんさい）の教訓を後世に伝えるため、被害（ひがい）が分かる形で保存される施設（しせつ）。石巻市では、津波で流されてきた油などから引火して火災が起きた門脇（かどのわき）小（2015年3月に統合され閉校）も「津波火災」を伝える施設として保存が検討されている。